

現場の声

平成 23 年 3 月 11 日に地震が発生し、津波が襲来、全交流電源が喪失して以降、現場作業員は、厳しく困難な現場での対応が続いた。

今回の事故対応にあたった事実関係の調査の中で、聞き取り等を通して、現場作業の厳しさ・困難さが明らかになった。以下に、当時の状況に関する現場の声を掲載する。

なお、これらは聞き取り等により得られた本人の記憶による生の声であり、事実でないことも含まれている可能性があるが、事故対応の状況を理解する一助として、敢えて掲載したものである。

【中央制御室の状況と、運転員による現場確認時の状況】

- 津波が来た時刻に 1, 2 号の電源盤のランプがフリッカ（注：点滅）し、一斉に消えていくのを目前で見た。DG が止まりバタバタとランプが消えていく状況だったが、何が起きたのか分からなかった。中操（注：中央制御室）の照明は、2 号機側はまっくら、1 号機側は非常用灯（薄暗いわずかな照明）に切り替わった。警報が全て消えて一瞬シーンとなった。2 号側が先だったような気がする。目の前で起こっていることが、ほんとうに現実なのかと思った。
- いつ頃か時間的には記憶に無いが、中操に運転員が「ヤバイ、海水が流れ込んできている」と大声で叫びながら戻ってきたので、津波で海水が流入してきていると思った。
- RPS（注：原子炉保護系）の MG セット（注：電動機・発電機セット）復旧で現場に行った補機操作員から後で聞いた話。1 号は起動できないのですぐに帰ってきた。2 号は起動して地下から聞いたことのない轟音がしてきたのであわてて階段を上がった。S/B（注：サービス建屋）入り口から水が入ってきていた。水をかぶりながら引き上げてきた。
- 恐怖心というよりも電源を失って何も出来なくなったと思った。若い運転員は不安そうだった。「操作もできず、手も足も出ないのに我々がここにいる意味があるのか、なぜここにいるのか」と紛糾した。（最後はどう収めたのですかの問いに対して）自分が「ここに残ってくれ」と頭を下げた。続いて別の当直長も無言で頭を下げてくれた。「若い研修生 2 人は免震棟に避難してくれ、皆それでいいな」と話をし、2 人を退避させた。
- 手も足も出なかった時、何も出来ないから非常用の乾パンと水を取ってきて食べろと指示し、少しでも落ち着かせようとした。
- 一部の人がここに残ってどうなるんですかという意見があり、他の人も口には出

さないが同じような思いだったと思う。**気分が悪くなって横になった人もいて、その人は今も（注：聞き取り時点）出社できない状況。**

- パラメータが見えてくる前は、**五感を失っている状況**だった。
- 訓練を色々行っていたが、それを活かせる状況ではなく、**手足を奪われたような状態の中、見れるデータを見ていた**といった状況だった。水素爆発のあたりから、**個人差もあるが落ち着かなくなる者もいた。**
- 中操内では、**被ばく線量を下げよう、当直員を1号側から2号側に寄らせてしゃがませた。**11日の夜から明け方にかけて。**主任級でも目を見て不安がわかった。**
- **爆発後、メンバーが体調不良で3人くらい横になって起きられないような状況**だった。
- **情報がなく、プラントの状態も見えない中で、何かをしていないとおかしくなりそうだったので、次の作業を探して現場で作業をしていた。**情報がなかったから、作業が出来たのだと思う。
- 大物搬入口から水が入って来ているのを発見、のぞき込むとシャッターの下から水がしみ込んできた。その直後シャッターが吹き飛び建屋内に津波が入って来た。**2人で走って離れたが恐怖で震えが止まらなかった。**
- 4B D/Gの運転状況の（確認の）ため、共用建屋に入ろうとしたが**入りロゲートに閉じ込められてしまった。**警備員に連絡したがつながらず、**2～3分後に津波が襲ってきた。**水が下から侵入し、もう死ぬのかと思っていたところ、同じ状況にあった先輩社員のゲートのガラスが割れ、脱出でき、自分のガラスを割ってくれたおかげで脱出することが出来た。**その時にはあご下まで水が来ており、本当に怖かった。**
- 現場に行く際に、指輪などが汚染して持ち出せなくなるかと思い、一度は外したが、**最悪の事態が起きたときに自分だと分かるように、また、お守りとして身に付けて現場に向かった。**
- **中操、現場とも真っ暗で、家族の安否、外部の様子も分からず（ニュースが見れない）不安でいっぱいだった。**
- 電源が無くてPHS、ページングとかが使えない中で、負荷をケーブルボルト室で落とす際に、連絡手段として人を中操からケーブルボルト室まで何人か配置してやりとりした。中操入口、食堂、現場控え室、ケーブルボルト室でだいたい5人ぐらい配置した。**多い時はタービン建屋を一人50mぐらい何回も往復した。**
- 1号機爆発により3・4号中操の線量が急上昇。当初1号機の発電機内の水素が爆発したものと認識しており、なぜ屋外の線量が上がるのが良く分からなかった。**通信手段が当直長席のホットラインのみで、中操外の状況や情報がほとんど分からず、とても不安だった。**
- 3号機がいつ爆発するか分からない状態であったが、次に交替で（中操に）行かなければならなかった。**本当に死を覚悟したため、郷里の親父に「俺にもしもの事が**

起きたら、かみさん、娘をよろしく」と伝えた。

- S/C スプレイ弁の開閉、炉注入弁の開閉、D/W スプレイ弁の開操作を実施したが、暗闇の中、足場が無い場所で操作する恐怖以上に、**近くでSRVの動作音と振動を体感した時、「この蒸気が漏れたら自分は死ぬのだろうな」と思いながら操作した。**
- 中操に戻ると真っ暗で、HPCI、RCIC のランプと DC 電源のランプしかついていない。**現実味がなかった。本当に起きている事なのか？実感がわかなかった。**
- 中操で3秒に0.01mSv(ずつ)上がり始めて、(中操から)なかなか出れない時は、**もうこれで終わりなんだと思った。**
- 汚染覚悟で保管されていた非常食の乾パンを食べたり、飲料水のミネラルウォーターを飲む際は、**全面マスクを外さざるを得なかった。**
- **生きていく(操作&監視)には食べるしかなく、身体の事が心配だった。**
- 更衣所の窓の外には信じられない光景。**あの防波堤がドミノのようにあっさりと倒れている。門型クレーンはSWポンプに突き刺さり、流された幾台もの車。真下からは鳴りっぱなしのクラクションが聞こえた。**
- 揺れの最中から、アドレナリンが大量に出たのか恐怖感はあまりなく、妙に冷静だったような気がする。まるで夢の中の出来事のような・・・。少なくともこの状態が2Fへ待避するまで続いた。
- 揺れが徐々に大きくなる中、正面に見えた6号スクラムの赤く光るANN窓、「5号機も来るな」と振り返った数秒後に5号機もスクラム信号発信。**火災警報もホコリが原因で多数発生、中操内も薄白くなった。鼻が詰まる、マスクしたい。**
- パラメータを確認したりしていると、「ドン」という衝撃音。皆「？」という表情を浮かべていたが、**まもなく5号D/Gが全台トリップ。5号中操は非常用の白熱灯だけになってしまった。**

【復旧作業での声(ベント)】

- ベントにいける人間を募った。**比較的若い操作員も手を挙げた。涙が出る思いだった。当直長をそれぞれ割り振るように編成した。完全装備で線量が高い状況もわからない中に行かせるので、若い人は行かせなかった。**
- 3組目まで準備したのは、**線量、体力や余震で引き戻すことなどを考えてのもの。同時に出発すると緊急避難時の救出ができない恐れがあるため、1チームずつ行くことを指示した。**
- 当直長の自分が現場に行きたいと思った。言葉にも出したが、同僚から「**お前は最後まで指揮をとれ!**」と言われた。頭が下がった。言葉もでなかった。申し訳ない思いでいっぱいだった。
- **同時に出発すると連絡が取れないので、1チームずつ行きましようとなっていた。建屋へは南側の二重扉から入った。すごいモヤがかかっている、なぜこんな状態な**

- んだと思った。通常は乾燥しているイメージ。南側から HCU（注：水圧制御ユニット）の後ろを通って、北西の階段を中地下まで降りた。線量計を持っていてチェックしていたが、トーラス室に入ってすぐにこれはダメだとなって、走って戻った。
- 格納容器のベント弁に治具をかませて開けたままにする作業を復旧班が行おうと思ったが、SRV（注：逃がし安全弁）から S/C（注：圧力抑制室）へ蒸気が行く音がすごくて、熱もあり、トーラスに入れなかったということで、操作出来ずに中操に戻ってきた。
 - 暗闇で、SRV ボコボコ吹いている、S/C 上部で靴がとけた。
 - ●●弁は開確認してくれっていわれて、S/C に行ったら靴が溶けた。目視では確認できなかった。弁が一番上にあるやつだったので、熱さ確認のため、トーラスに足をかけたらずるっと溶けた。やめたほうがいいと判断した。
 - 現場は、炉注入の●●弁開と、3/13 5:08 の S/C スプレイ弁開と閉操作。長靴が溶けたのは、D/W スプレイに行って S/P スプレイを止めた時。S/C 弁が熱くて握れなかった。

【復旧作業での声（注水、SRV・計器復旧、電源復旧）】

（注水）

- 協力企業の社員さんが、社長からは戻るよう言われていたのに、我々みんなで何とか発電所を守るために一生懸命対応している姿を見て、「私は帰れない」と泣いて残ってくれた。直接社長に「もう少し残ってから戻る」と言ってくれていた。

（SRV, 計器復旧）

- SRV のケーブル切り（注：SRV を開くために必要なバッテリーを接続するケーブルを処理する作業のこと）も大変な作業。ワイヤストリッパーもない状況で、かなり長い長さのワイヤー端末処理（心線出し）を傷つけないように気をつけながらペンチでやり、10個直列でバッテリーとつけるために行うのは大変。中操は暗く、難しい。ゴム手でビニールテープでバッテリーに線を付けるときに、ゴム手にべたべたついて大変だった。
- バッテリーもつないでいき、DC の 120V くらいになると、パチパチで恐ろしい状態。繋いでいく際には火花がパチパチの状態。24V でさえ、手が滑って火花が大きく出てバッテリーの端子が溶けたときもあった。

（電源復旧）

- 余震、津波警報で現場に出られず、免震棟の中では当直から電源復旧に関する情報も来なかったため、TL（注：チームリーダー）、主任クラスで志願して T/B（注：タービン建屋）や S/B（注：サービス建屋）の現場調査を申し出た。

- マンホールの蓋が水の力であいていて、月明かりだけで、瓦礫が散乱する中、一歩一歩開口がないか確認しながら進んだ。
- **通常であればケーブル布設作業は1・2ヶ月かかる。数時間でやったのは破格のスピード**だと思う。暗闇の中、布設のための貫通部を見つけたり、端末処理を行ったりする必要もある。高圧ケーブルの端末処理は特殊技能で、丁寧にやる必要がある。それだけで通常は4～5時間程度かかる。また、通常なら機械を使ってケーブルを布設するが、今回は人力でやっている。ケーブルは15cmくらいのケーブルが3本集まっているもので、重量がある。
- 一番インパクトがあったのは余震。行っては戻れ、行っては戻れとなった。その度に、安否確認にも時間がかかった。相当大きい余震があり、死に物狂いで走って帰ってきて、すぐにまた向かうわけにもいかず、2時間程度休んでまた向かうという感じだった。
- **電気品室は水があった。長靴での作業。電気が来ていないとは思っているが、感電の可能性もあり、死ぬかもしれないと思いながらの作業であった。**
- 死と隣合わせの作業だった。慣れない全面マスクを着用しての作業、余震や津波の度に走って逃げた。この繰り返し。
- P/C（注：低圧電源盤）があるところは堰があって、その中に水がいっぱい溜まっていた。長靴でないとP/Cまでいけない状態で、**作業をやるにも工具を下に置けない。明かりを照らしたり、道具を持ったりする人が必要だった。**
- みんな地震で**家族がやられている人もいるし、涙を流しながら会社に勤めていた人もいたし、みんな電話が繋がらないから、生きてるか死んでいるかも分からない状態**だった。

【爆発時の状況】

（1号機の爆発の時）

- **消防車の窓が爆風で割れて、それからスポンと（瓦礫が）とんできた。**水素ボンベから漏れたと思った。あの辺ガスが充満していたんだと思う。それで**一瞬ゆがんで見えた。そしたらものすごい音で、爆音と共に、中が浮いたみたいな感じになった。**その時に、ロケットのように正面から飛んできた。瓦礫が。
- **なんの前ぶれもなく突然中央制御室全体がごう音とともに縦に揺れた。部屋全体が白いダストにおおわれた。「全面マスク！」**の声で全員マスクを付けた。椅子から落ちた者もいた。
- 1号側の逆洗弁ピットの脇にいた。あまりの衝撃でびっくりした。**空を見上げたら、瓦礫が空一面に広がっていて、バラバラ降ってきて、二人で逃げた。**瓦礫にあたっていたかもしれない。二人で走って逃げて、あまりに瓦礫が降ってくるので、もう一人の人を突き飛ばして、タービン建屋脇にあるタンクの壁際に沿って瓦礫をよけ

るような行動を取った。少したってから、逃げようとしたら、もう一人がトラックの脇で立てなくなっていたので、二人で戻って抱えて歩いて逃げた。ひたすら無線で爆発だと叫んで歩いて戻った。

- 1号爆発の時は免震棟入口のそばにいたが、中に入れず、逃げ回った。近くにあった消防車の中に逃げ込んだ。

(3号機爆発の時)

- S/Bに入ったら後ろで衝撃があった。音はよく覚えてない。風圧みたいな感じだった。で、中操に行って話しを聞いた。車に6名全員乗って帰ろうとしたが、がれきの山だった。集中R/W側を通して帰ったらどんどん進めなくなりひどい状態だった。その時4号がやられているのを見た。がれきで進めないの、4号R/Bの山側から車を乗り捨てて走って逃げた。車を置きっぱなしで、もう走れないので、7番ゲートから出た。
- 風圧はなかったが、風船をバンとやったみたいな音だった。一瞬で真っ白になって、しばらくしてガラガラと音がしたのでコンクリートが降ってきたと思った。アーケードが津波で倒れていたがそこに隠れようとした。でも空が見えていてダメだった。すぐそばにあった配管が、上からは丸見えだったが、その陰にぺたっと体をつけて隠れた。死ぬかと思った。バンとなって真っ白になって、見えるようになるまで待っていた。2号と3号の間を行ったが瓦礫の山だった。車は動かせない状態だったので、瓦礫の上をみんなで歩いた。2,3号機間が瓦礫がすごかった。
- 1号機水素爆発後にケーブルを引きなおしたが、3号機で水素爆発が起こった。メンバーは走って緊対室に戻ってきた。作業員はパニックだった。
- 3号の爆発の時は2号機の松の廊下にいた。すさまじい爆発音とともに、埃が舞って真っ白になった。乗ってきた協力企業の車が吹っ飛んでいたの、本当に恐怖だった。

以 上